

ボードレール

『悪の華』第三版（一八六八年）に追加された作品

罰せられた書物のためのエピグラフ

*Épigramme pour un livre condamné*

平和な牧歌的な読者よ、  
慎ましい朴訥な清廉の士よ、  
捨てたほうがいい、この土星の、  
魔宴の、憂愁の書は。

もしきみが、海千山千の司祭  
サタンのもとで、修辞学を修めていないなら、  
捨てる！ きみには書いてあることがわかるまい、  
それとも私をヒステリックと思うだけだろう。

だが、きみの瞳が、ただ魅了されるままにはならず、

深淵のなかへもぐってゆけるなら、

私を読め、私を愛するやり方を学ぶために。

自分の天国をさがしもとめ、

苦しんでいる、好奇心旺盛なたましいよ。

私をあわれに思え！：でなければ、きみを呪うぞ！

悲しいマドリガル

*Madrigal triste*

1

行儀がいいって、それが何？

美人でいろ！　そして悲しく！　涙は

顔に魅力を添える、

河が景色を魅力的にするように。

嵐は花々を若返らせる。

打ちひしがれたきみの額から

悦びが逃げていくとき。

きみの心が恐怖のなかへ沈むとき。

きみの今のうえに過去のおそろしい雲が  
ひろがるとき。ぼくはたまらなくきみを愛する。

きみを愛する、その大きな瞳が

血のように熱い水をはふらせるとき。

ぼくの手はきみをあやしているのに、

きみの苦悶が、重すぎて、

断末魔の喘ぎのようにもれるとき。

ぼくはひとつも残さずに吸いこむ、

神々しい官能！ 深く甘い賛美歌！

きみの胸の啜り泣きを。

きみの心は、眼からこぼれる真珠で

輝いている、と思いながら。

知っているさ、根無し草の

昔の愛でいっばいのきみの心は、

鍛冶屋の炉のようにいまも燃えているって、

そして、その胸のしたには、地獄落ちの者たちの  
自尊心も少しは育まれているって。

でも、いとしい恋人よ、きみの夢が

「地獄」の火に照り映えたことのないうちは、

そして、ひっきりなしの悪夢のなかで、

毒や剣を夢み、

火薬と武器に心をうばわれ、

胸襟を開くのはおそるおそる、

いたるところに不幸を読み解き、

いよいよその時が鳴るとのけぞり、

ついにあらがうことのできない

〈嫌悪〉の抱擁を感じた、そんなことのないうちは、

きみは、怯えながらしかぼくを愛せない

奴隸である女王のきみは、

不健康な夜の恐怖のなかで、魂を叫びでいっぱいにして  
ぼくに言うことなどできないだろう、

「わたしはあなたと同じ、ああ、私の〈王様〉！」。

異教徒の祈り

**Prière d'un païen**

ああ！ 炎をゆるめないで。

鈍くなったぼくの心を熱くして。

官能よ、魂の拷問よ！

*Diva ! supplicem exaudi !*

空気のなかにひろがっている女神、

ぼくらの地底の炎！

空しく待ってうんざりしている魂のねがいを

聞き入れてください、青銅の歌を捧げる魂の。

「女神よ、伏して懇願する者の祈りをかなえたまえ。」



官能よ、いつもぼくの女王でいて！

肉とビロードでつくられた

セイレンの仮面をつけて、

それとも、注いでくれてもいい、無形の神秘的な

ワインのなかに、きみのずしりと重い眠りを、

官能よ、弾力のある幽霊よ！

## 反抗者

### Le Rebelle

怒り狂った〈天使〉が鷲のように大空から舞い降り、  
不信心な男の髪毛をむずとつかみ、

ぐらぐら揺すりながら、言う。「きまりを分からせてやる！

（おれはおまえの〈天使〉だ、わかるか？）おれがそいつを望むのだ！

いいか、顰<sup>しん</sup>め面などやめて、愛さなくてはならない、

貧しい者、意地悪なやつ、ひねくれ者、痴れ者を。

イエス様がお通りになるとき、おまえの慈愛で

勝利を祝う絨毯をつくり、敷いてさしあげられるように。

これが〈愛〉だ！ 心が鉄面皮にならないうちに、

神様の栄光でおまえの法悦を燃え立たせろ。

これこそが、いつまでも色香のあせない、ほんとうの〈官能〉だ！」

そして〈天使〉は、いやはや、深情けで懲らしめながら、

巨人の拳をふるい、破門になった男を痛めつける。

けれども地獄墮ちの男はいつも答える。「おれはいやだ！」

告げ知らせるもの

L'Avertisseur

人間の名に値する者はみな  
心に黄色い〈蛇〉を飼っている。  
玉座にあるかのように居座り、  
人が「したい！」と言っても、「だめだ！」と答える。

半獣女神<sup>サテイレス</sup>や水の精<sup>ニクス</sup>たちの  
みつめる眼のなかにきみの目を沈めてみるといい、すると  
〈歯〉は言う。「おまえの義務のことを考えろ！」

<sup>2</sup> Satyresses 「satyre (サチユロス)」の女性形。サチユロスはディオニソスの仲間で、山野に棲む好色な半獣半人の存在。

<sup>3</sup> Nixes ゲルマン神話における水の精。ここでは脚韻(les yeux fixes)のために使用されたようだ。

子をつくり、木を植え、

詩句を磨き、大理石を彫刻するといひ。すると

〈齒〉は言う。「おまえは今夜まで生きているのか？」

何に手を染めようと、何を望もうと、

人はかたときも生きてゆけない。

耐えがたい〈蝮〉の告知を

受けずには。

沈思

Recueillement

いい子にしていなさい、〈苦悩〉よ、もっと落ち着いて。

おまえは〈夕暮れ〉をねだっていた。降りてくるよ、ほら、ここに。ほの暗い大気が街を包んでいる、

ある者には平安を運び、ある者には心配を運びながら。

人間の卑しい群が、

容赦なく体罰を加える 〈快樂〉に鞭打たれ、

なさない宴のなかへ悔恨を摘みに行っているあいだ、

〈苦悩〉よ、さあ、ぼくに手を貸して、ここへおいで、

みんなから離れて。ほらあそこ、死んだ〈歲月〉が、時代遅れの衣装を着て、

空のバルコニーから身を傾けている。

〈哀惜〉が微笑みながら水の底から出てくる。

瀕死の〈太陽〉はアーチのしたで眠りにおちていく。

そして、〈東の方〉に裳裾をひくながい経帷子のように、  
お聞き、愛しい子よ、お聞き、優しい〈夜〉が歩いている。

蓋

Le Couvercle

どんな場所へ行っても、それが海や陸地であろうと、燃えさかる風土や、白い太陽のもとであろうと、イエスの僕、シテール島<sup>4</sup>の宮廷人、暗鬱な乞食、あるいはまばゆいクロイソス王<sup>5</sup>、都会人、田舎者、放浪者、引きこもり、その脳髄は活発だろうとのろまだろうと、いたるところ人間はこうむっている、神秘の恐怖を。そして上の方をふるえる眼で見あげるばかりだ。

<sup>4</sup> Cythère ヴィーナス崇拜の島（ギリシヤ）。

<sup>5</sup> Crésus 紀元前六世紀のリディアの王。富貴で名高い。



上には〈天〉！ 息苦しい洞窟の壁。

明かりのともる天井はオペラ・ブッフアのため。

舞台では血塗られた地面をひとりひとり道化役者が踏みつけている。

放蕩者には恐怖となり、狂った隠者には希望となる。

〈天〉！ 大きな鍋にかぶせた黒い蓋

そこで煮えているのは見分けのつかない広大な〈人類〉。

気分を害された月

La Lune offensée

〈月〉よ、ぼくらの父祖たちは慎み深くきみを讃えていた。

粹な装いをこらした星々がきみのあとに従いてゆく

きらめく後宮、その青い国の高みから、

古なじみの老いたサンティア<sup>9</sup>よ、ぼくらの巢窟<sup>ともしび</sup>の灯よ、

きみに見えるのは、おんぼろな、でも幸せなベッドのうえで

口をあけて眠っている恋人たちが齒のさわやかなほうろう質を見せているところ？

詩人がその仕事に額をぶつけているところ？

それとも乾いた草のしたで蝮がつるんでいるところ？

<sup>6</sup> Cynthia 月の女神 Diane の別名。

黄色いドミノ<sup>1</sup>を着て、そつと忍び足で、

きみは、かつてのように、夕べから朝まで、

花の盛りも過ぎたエンデイミオン<sup>2</sup>の魅力に口づけしにゆくのか？

「——わたしに見えるのはあんたのお母さんよ、衰退した世紀の子よ、

つもった年月の重みを鏡のほうへ傾けているわ、

そしてあんたを養った乳房におしろいを塗りたくっているわよ、とつても上手に！」

1 仮面舞踏会用の衣装。フード付きのドレス。

2 Endymion 月の女神セレネーに愛された美貌の青年。セレネーは彼がその美を保つため彼を永遠に眠らせる。

深淵

Le Gouffre

パスカルには深淵があった、自分と一緒にうごく深淵<sup>9)</sup>。

——ああ！ すべて深淵だ、——行動、欲望、夢、

言葉！ まっすぐに逆立つぼくの毛のうえを

幾度となく〈恐怖〉の風が吹き過ぎるのをぼくは感じる。

上も、下も、いたるところ、深さ、砂浜、

沈黙、ぞつとするような魅惑的な空間……

夜々の底に〈神〉がその博識な指で

いろいろな姿の、たえまない悪夢を描いている。

<sup>6)</sup> 言い伝えでは、パスカルは彼の左側に深淵が開くという幻覚におそわれ眩暈に苦しんでいた。

ぼくは眠りがこわい、ぼくぜんとした恐怖に充ち、どこへ通じているのか  
わからない、大きな穴を人がこわがるように。  
あらゆる窓越しに、ぼくには無限しか見えない。

いつも眩暈に襲われ、ぼくは精神は  
虚無の無感覚を妬んでいる。

——ああ！ けっして抜け出せないのか、〈数〉と〈存在〉から！

イカロスの嘆き

*Les Plaintes d'un Icare*

売春婦たちの情夫は

幸せで、闊達で、満ち足りている。

ところがぼくは、腕がへし折れている

雲を抱きしめたからだ。

大空の底ふかく燃えている

たぐいない星々のおかげなのだ、

火でだめにされたぼくの目は

太陽の思い出しか見られない。

空間の果てと中心とを

見つけようと思ったが空しかった。

なにかよくわからない火の瞳のしたで

翼がこわれていくのを感じる。

美への愛に身を焼かれながら、

崇高な名誉を手にすることもできないだろう、

ぼくの墓になってくれる深淵に

じぶんの名前をつけるという。

## 真夜中の反省

## L'Examen de minuit

柱時計は真夜中を打ち、

ぼくらを皮肉たつぷりにうながす、

逃れ去る一日をどのように

使ったのか思い出して見よ、と。

——今日、運命の日、

十三日の金曜日、ぼくたちは、

すべてを知っていながら

異端者のふるまいに及んだ。

ぼくらはイエスを冒瀆した、

神々のなかでも一番文句のつけようのない神を！



どこかの怪物じみた〈大富豪<sup>グレサス</sup>〉の  
テーブルにつく寄食者のように、

ぼくらは、〈悪魔〉たちの立派な家臣である

獣<sup>けだもの</sup>の気に入るために、

じぶんたちの愛しているものを侮辱し、  
嫌悪をおぼえるものを褒めそやした。

人がまちがって軽蔑している弱者を

卑屈な刑吏となって、悲しませた。

巨魁な〈愚劣〉を賛仰した。

牡牛の額をした〈愚劣〉を。

ばかばかしい〈物質〉に

うやうやしく接吻した。

そして腐敗の青ざめた光を

ことほいだ。

最後に、ぼくらは、錯乱のなかに  
眩暈を沈めようとして、

〈豎琴〉の尊大な司祭であるぼくら、  
不吉なくさぐさの陶酔を

繰り広げることを栄光としているぼくらは、  
渴きを感じてもいないのに飲み、腹が減ってもいないのに食べた！……

——いそいでランプを吹き消そう、  
闇のなかに隠れよう！

ここから遠く離れて

**Bien loin d'ici**

ここは神聖な小屋、

着飾ったこの娘は

おとなしく、準備はいつも出来ていて、

片手で胸を扇ぎながら、

クッションに肱をつき、

聴いている、水盤が泣いているのを。

これはドロテの部屋。

——遠くでそよ風と水と歌っている

甘やかされたこの子をあやそうと、

咽び泣きにとぎれながら。

上から下まで、念入りに、

匂い油と安息香と

繊細な肌にぬられている。

——片隅で花々は恍惚としている。